鎌倉時代

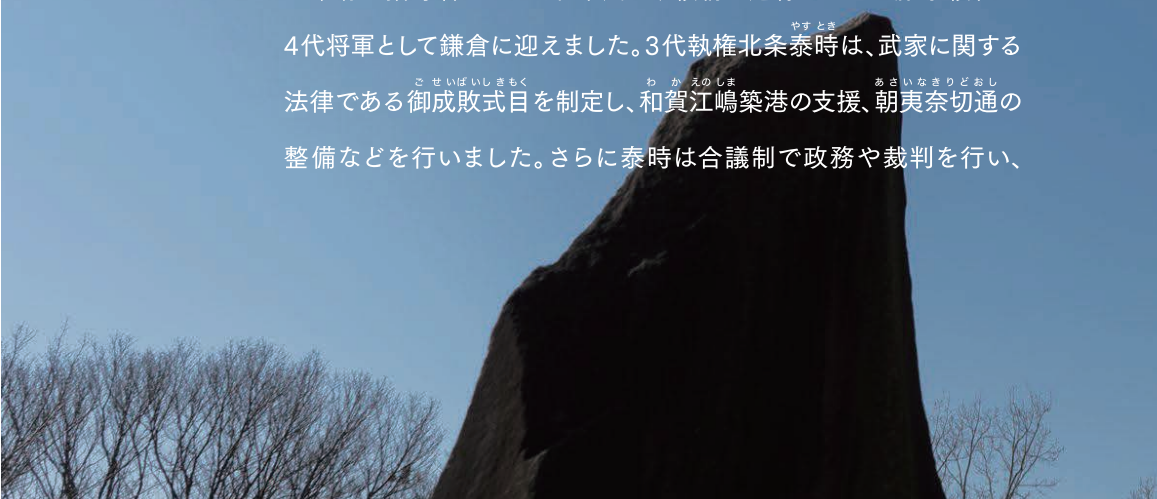
日本の中心が変わった！ 鎌倉で武家の政治がスタート

鎌倉は、源頼朝が1180(治承4)年に多くの兵を連れて鎌倉に入ってから、1333(元弘3)年に北条高時が自害して、幕府が滅亡するまで、約150年間繁栄した武士の都でした。

1159(平治元)年、平治の乱のときに平清盛に捕らえられ、20年間も伊豆に流されていた頼朝は、1180(治承4)年に平氏を倒そうと挙兵し鎌倉を本拠地とします。1185(文治元)年、頼朝は平氏を滅ぼし、各国に守護(地方官)、地頭(土地の管理や租税の徴収をした者)を配置。頼朝は、1192(建久3)年に征夷大将軍に任ぜられ、名実ともに鎌倉幕府が成立しました。幕府は棟梁である鎌倉殿と主従関係にある御家人とで構成される武家政権でした。

頼朝は鶴岡八幡宮を中心として、若宮大路を整備しました。1199(建久10)年に頼朝が死去すると、2代将軍頼家は、外祖父の北条時政や母の北条政子と対立します。時政は頼家を暗殺、弟の実朝が3代将軍になります。しかし、実朝は頼家の子・公暁に暗殺され、源氏の将軍は3代で断絶します。

幕府の指導者となった北条氏は、頼朝の遠縁にあたる藤原頼経を4代将軍として鎌倉に迎えました。3代執権北条泰時は、武家に関する法律である御成敗式目を制定し、和賀江嶋築港の支援、朝夷奈切通の整備などを行いました。さらに泰時は合議制で政務や裁判を行い、



執権政治の形を整えます。

8代執権北条時宗のとき、元(モンゴル帝国)が二度日本を襲いましたが、元は二度とも撤退します。三度目の元の襲来に備えた西国の防備のために、御家人の経済的な負担が重くなり、幕府への不満が高まります。

後醍醐天皇の討幕運動に呼応した新田義貞らが鎌倉を攻撃すると、14代執権北条高時ら一門と家臣が自害して、鎌倉は陥落し、幕府は滅亡しました。

源氏山公園の源頼朝像は、鎌倉のまちを向いている

鶴岡八幡宮の舞殿(手前)と
大石段上の上宮

文学者の足跡

源実朝(みなもとのさねとも) 1192(建久3)年～1219(建保7)年

12歳で征夷大将軍になった源実朝は、頼朝(よりとも)と北条政子(ほうじょうまさこ)の次男。28歳のときに鶴岡八幡宮で甥の公暁(くぎょう)に討ち取られます。歌人としても知られ、〈世の中は つねにもがもな なぎさこぐ あまの小舟の 綱手かなしも〉は、『小倉百人一首』に選ばれています。

1104(長治(ちょうじ)元)年

荏柄天神社(えがらてんじんしゃ)

鮮やかな朱色の社殿が、山の緑に映える

福岡県の太宰府(だざいふ)天満宮、京都府の北野天満宮とともに、日本三古天神に数えられる古社(諸説あり)。頼朝(よりとも)はこの社を大倉幕府の鬼門を守る鎮守社としました。朱色に塗られた社殿が華やかです。

天神(菅原道真公(すがわらのみちざねこう))に欠かせないウメの木がある

1180(治承4)年

鶴岡八幡宮

鎌倉の中心、上宮から若宮大路を一望に

平安時代、東北平定を果たした源頼義は、その帰路、鎌倉由比郷に源氏の氏神である石清水八幡宮を勧請しました。

それから約120年後の1180(治承4)年、頼義の子孫にあたる源頼朝が鎌倉に入ってきたときに現在の場所に遷し、1191(建久2)年には、今日に続く上下両宮の配置となりました。頼朝の死後、執権を務めた北条氏をはじめ、足利氏や豊臣秀吉・徳川氏などの時の最高権力者も社殿の修理に努めました。時代を問わず篤い崇敬を受けている、鎌倉のシンボル的存在です。

鎌倉を深掘り

鎌倉時代を想像させる流鏑馬神事

鶴岡八幡宮では、9月の鶴岡八幡宮例大祭で、流鏑馬神事が行われます。1187(文治3)年の放生会(魚や鳥獣を放し、殺生を戒める儀式)に奉納したのが始まりで、狩装束をまとった武者が馬に乗って走りながら、全長約250mの馬場道に立てられた三的を次々に射る姿は、鎌倉時代の息吹を感じさせます。他にも除魔神事や舞楽など、鎌倉時代にさかのぼる行事があります。

※流鏑馬は4月鎌倉まつりでも行われます。

鶴岡八幡宮例大祭 流鏑馬神事

1182(寿永元)年

若宮大路

鎌倉時代の都市計画を感じながら歩く

鶴岡八幡宮の上宮から見下ろすと、若宮大路がまっすぐに海に向かっているのが見えます。この道は源頼朝が整備したもので、二ノ鳥居から三ノ鳥居までは段葛と呼ばれる参詣の道が残ります。『吾妻鏡』などによれば、妻・政子の安産を祈願してつくられたものとされます。

若宮大路は、滑川橋のたもとから一ノ鳥居、二ノ鳥居を抜け、鶴岡八幡宮入り口の三ノ鳥居までの約1800m

鎌倉を深掘り

源頼朝の都市計画

鶴岡八幡宮前から、由比ヶ浜に向かって南北に延びる若宮大路。頼朝は参道を幅約33mのまっすぐな大路にし、中央には北条時政らの御家人が土や石を運んで段葛を築きました。今も鎌倉を象徴する道です。

1951（昭和26）年

旧神奈川県立近代美術館鎌倉館本館（鎌倉文華館鶴岡ミュージアム）

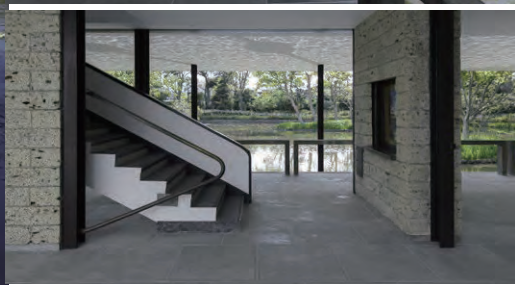
戦後の混乱と再生の時代に、文化芸術の指針となる

終戦からわずか6年、まだ占領下だった日本に、最初の公立近代美術館として神奈川県立近代美術館が開館しました。

きっかけは、神奈川ゆかりの美術関係者が神奈川県美術家懇話会を設立し、美術館建設を目指したこと。メンバーは有島生馬、安井曾太郎、鳥海青児、鏑木清方、前田青邨、伊東深水らの画家や研究者など33名でした。

設計は坂倉準三（1901〜1969）。東京帝国大学文学部美術史学科を卒業後、渡仏。近代建築の巨匠ル・コルビュジエの事務所で修業し、1937年のパリ万国博覧会日本館の設計で博覧会建築部門グランプリも獲得した人物です。2階建て、延床面積1,575㎡という、今日から見ればささやかな美術館は、戦争直後の日本建築界のトピックとなり、開館記念の第1回展として「セザンヌ・ルノワール展」を開催しました。

中庭を中心にして周囲に機能を配した明解な平面構成と、建物の主要部分を2階にして、それを列柱郡で支える「ピロティ」を設ける様式は、ル・コルビュジエが提唱した「無



限成長美術館」というコンセプトの踏襲でもありますが、「自然環境との調和」を意識した坂倉は日本固有の素材を取り入れるなど、モダニズムと日本の伝統が融合する独自の空間を生みだしました。

2階から階段を下りてピロティに出ると、平家池に向かって空間が開けます。晴れた日には、平家池の水紋が反射して、天井にいくつもの光の環を描きます。

鎌倉文華館（かまくらぶんかかん） 鶴岡（つるがおか）ミュージアムとして、新たな出発

鎌倉館は65年間にわたり、国際的な視野を持ちながら常に先導的な美術館活動を行ってきました。しかし、鶴岡八幡宮との借地契約満了に伴い、2016年3月31日に閉館。同年11月に県指定重要文化財に指定、12月には県から鶴岡八幡宮に土地の返還と建物の無償譲渡が行われました。その後、旧館の歴史的建築の意匠を保ちつつ、最新の技術によって補強、復原、機能を向上させるため改修工事を行い、2019年6月、新たな文化発信拠点「鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム」として生まれ変わりました。鎌倉の魅力を紹介する新しい使命をもったミュージアム。鶴岡八幡宮の歴史を軸に、これまでの「歴史」と、これからの「未来」へつながる活動を行っています。

開館当初の旧神奈川県立近代美術館鎌倉館本館
西側正面入口大階段（上）／南側外観（下）
撮影：村沢文雄（1951年）

1185(文治元)年

小動神社

江ノ島詣での道中、腰越を守る神社へ

源頼朝が伊豆に流されていた時代から仕えていた佐々木盛綱が、近江の国から八王子宮を勧請。のちに、新田義貞が鎌倉攻めの戦勝を祈願して、社殿を再興しました。現在の名前は明治時代からのもの。

1185(文治元)年

銭洗弁財天宇賀福神社

お金を洗うと御利益があるという泉

頼朝が人々を飢饉から救おうと祈ったところ、宇賀福神が夢枕に立ち、この湧き水を教えました。北条時頼もこの神を信仰し、銭を洗って繁栄を祈りました。現在もお金を洗う人が絶えません。

トンネルをくぐって境内に入るのも珍しい

1188(文治4)年

浄妙寺　開基／足利義兼　開山／退耕行勇

手入れが行き届いた境内には枯山水も

足利義兼は北条政子の妹の夫。退耕行勇は頼朝と政子夫妻に尊敬された高僧です。元は極楽寺といい、のちに浄妙寺としました。鎌倉五山の第五位にあたります。

手入れが行き届いた枯山水

鎌倉を深掘り

鎌倉五山はどう決まったか

五山とは、臨済宗で最高の寺格を幕府が朝廷にはかって決めた五つの寺のこと。この制度は南宋で始まり、日本でも鎌倉幕府によって取り入れられました。初めは京都と鎌倉の寺を一緒にしていましたが、1386(至徳3・元中3)年に室町幕府によって、南禅寺を別格にして、京都と鎌倉それぞれに五山が定められました。鎌倉五山の第一位は建長寺、第二位は円覚寺、第三位は寿福寺、第四位は浄智寺、第五位は浄妙寺。五山の寺は幕府の管理下におかれました。

鎌倉を深掘り

昔の旅人が見た鎌倉の景色とは

鎌倉時代に書かれた『海道記』には、由比ヶ浜の様子が登場。『海道記』では「數百艘の舟どもつなをくさりて」と浜の栄える様子が。また、由比ヶ浜を一望できる極楽寺坂切通（ごくらくじざかきりどおし）などは、長年旅人たちが鎌倉に着いたことを実感できる絶景ポイントだったようです。

成就院の階段から見る、由比ヶ浜と材木座海岸

法華堂跡（源頼朝墓・北条義時墓）

鎌倉の重要人物ふたりの墓

現在、源頼朝の墓がある場所は、法華堂の跡といわれています。頼朝は、聖観音像を自分の守り本尊としてまつるために持仏堂を建て、それが死後、法華堂と称され、供養が行われました。

頼朝の墓そばの開けた場所は、２代執権・北条義時の墓です。義時は、北条政子の兄弟で、頼朝の子・実朝が将軍の時代に執権をつとめました。現在、墓らしいものはありませんが、発掘調査の結果、お堂の遺構が見つかっていて、義時を供養する別の法華堂が建てられていたことがわかっています。

薩摩藩主・島津重豪（しまづしげひで）が整備した層塔（源頼朝墓）